

「モラルに対する人間の態度」

岩 見 勉

恐らく一度も「モラル」とか「道徳」とかについて、それがどんなものであるかなどと他人から教えられたことのない人であっても「モラル」「道徳」とは無縁な存在ではありえない。日常生活の中で、その人のまわりには常に眼に見えぬ「モラル」がうずまいていと云える。何かを為そうとする時、その人は自分で知らない間に「モラル」を知っていると云える。なぜならその人は、その時の彼の行為を説明せられるとした場合、その行為が通常一般の行為であり、そうでない行為は彼のまわりの人々から批判を受けるからだと言ふ意味のことを云うだろう。つまり彼は、習慣となつている世間で通常一般な行為を選んだと云ふこと（勿論無意識にはあろうが）「モラル」を知ったことになるのである。

このような「モラル」や「道徳」については一片の知識を持たない人であっても、為してはいけなさと信じている行為と為してもかまわぬ、場合によつてはむしろ進んで為すべきだと信じることの出来る行為との区別は十分得ているのが当然である。それが普通一般である。また他人の行為を見て、口に出して云わなくとも、心の中ではその行為の善悪を判断しているのが普通である。つまり「モラル」については全く無知であっても、人間の行為、態度についての善悪の判断の基準を（無意識であるとしても）持つているのである。

そして彼自身、自分で行為する場合、知らず／＼の間に彼自身の持つている善悪の判断の基準に従っているのである。

この際勿論、彼の行為、態度が道徳的であるか否かと云うことや、彼の保持している善悪の判断の基準が正しいか否かと云うことは問題ではない。私がここで云わうとしているのは、「モラル」や「道徳」には全く無知であつても、その人はその人なりに人間の行為や態度の善悪の判断の基準を持っており、彼自身、その基準に従つて行為し、態度をとるものだと言ふことを通常一般から云うことが出来ると云うことなのである。彼の善悪の判断が誤つたものであつても、彼が善悪の判断を持っていてと云うことは変わらないのである。

全ゆる人々は、意識的にしろ無意識的にしろ自分達の行為、態度を通して自分達のモラルに達する考えを現わしているとも云える。人々が或る事柄に対してある種の行いを為したり、ある種の態度をとつたりするが、その行為なり態度なりの中に人々のモラルに対する考えが現われているのである。その行為や態度の中にモラルに対する考えが表現されているのである。別な云い方をすればそれら行為や態度そのものがモラルに対する考えであるとも云える。「モラル」について全く無知な人でもその時はモラルを考えていると云える。行為とか態度とかを手段として考える、つまり、自分の身体を使って考えていると云える。

しかしモラルを考えているとかモラルに対する考えとか云う「考える」という意味は、勿論モラルの本質は如何なるものであろうかとか、モラルの価値はどうかなどと云うモラルそのものに対する考えと云うことではない。云うなれば「モラル論」とか「道徳論」とか云うものではない。つまり倫理学で問題として扱ふようなことではないのである。むしろこう云ふことはどうせもよいことなのである、モラルとはどんなものかとか、モラルの本質は何かなどと云うことは論外なのであつて、人々の行為とか態度とかモラルに対するその人々の考えを現わしていると言ふのは、云つてみればその人々がモラルをどのように受け取つているかと云うことなのである。モラルと云うものが、その人々に如何に受け入れられているかと云うことなのである。

例えて云うと、モラルを前にしてその人はおびえているか否かにはかんでいないか、よろこんでいるか、不思議そうな顔をしていないか、迷惑な顔をしているかとか云うようなモラルに対する人々の一種の反応なのである。だからそのモラルが何であるかなどと云うモラルの本質論とでも云うべき、モラルそのものに対する論議は含まれていないし、モラルそのものについては考えられていないのである。考えられていないと云うより、むしろ考えられる以前なのである。従つて先にも云つたように、「モラル」に關しては一片の知識も持たない人、「モラル」と云う言葉すら耳にし

たことのない人であっても、行為や態度の中でモラルを考えていると云えるのである。

人々のこのようなモラルに対する「意識的にしろ」無意識的にしろ」反応は、云つてみれば人々のモラルに対する態度であり、ポーズとも云えるものである。そしてこのようなモラルに対する人々の態度とかポーズを問題にして考えてゆくと、今までの「道徳論」の如き空虚さから救われるような気がするのである。

それでは一体、人々にこのモラルに対するポーズをとらせるものは何であらうか、人々のモラルに対する考えである、人々のモラルに対する答であるポーズをとらせるものは何であらうか。つまり人々のモラルに対する考えを決定づけるものは何であらうか。日常生活の中で、知らず／＼のうちに現わしている行為（広い意味では生活）その行為を決定づけるものは何であらうか。日常生活に於て人々はモラルと云うものをどのように処理しているのであらうか。こうした問題を考へてゆくのは意義のあることと思ふ。（現に思想の科学研究会の伝記グループの人々は、より具体的個別的面から成果を挙げている。河出新書「民衆の座」参照）

日常生活に於ける人々の態度そのものがモラルであると云うのは、モラルと云うものが現実にとる姿は、我々人間の広い意味での行為であり得ないと云うことである。モラルはどんな形をしているものか、モラルはどこにあるのかと問はれば、それは我々人間の行為なのだと言えより仕方がない。モラルはどこにあるのでもない。モラルは我々人間の中にある。そのモラルが具体化する、つまり人々が行為する場合、それを決定するものは何であらうか。それは我々人間の連帯性である。

日常生活に於てモラルが我々に現わす姿は当為と云う形である。「……すべし」と云う形で現われる。が一体「……すべし」とは云うが何に対して「すべし」なのであらうか。何を保証としてすべきなのであらうか。モラルは我々に對して何を保証としているのか。我々はモラルに對してどんな指針を有しているのであるか。それは、つまり人間の社会的連帯性であると思ふ。共に同じ社会に生活していると云うことは、それらの人々に對する一つの条件である。ある社会に生活しているものは、その社会の中で生活していると云う根本的な規制を受けている。いわば入場券のようなものである。共同生活を営むものは、共同生活を営んでいると云うこと、そのことを絶対的条件として受けとらねばならない。とはや社会を離れた孤独な生活など不可能な我々に對しては、このことは生きる為の条件である。このことは、人間の歴史を調らばるまでもなく明らかなことである。現代の我々の生活は単に孤独な生活をし

ていないと云うだけではなくて、共同生活をしていると云うことなのであり、共同生活をしなければならぬと云うことである。従つて社会生活に於て人々間の連帯性と云ふものは、我々にとつてはむしろ絶対的なのである。

ある社会に生活するものは、その社会に於ける人々との間の連帯性を絶対必然的なものとして受け取らなければならぬし、又現にその社会に生活していると云うことは、受け取つてゐると云うことでもある。従つてその社会に生活している人々の行爲へない意味での生活へは、全てこの連帯性と密接な關係を持つてゐるはずである。と云ふものは、この連帯性と全くかけ離れた、連帯性とは全く無關係な生活はありえないと云える。日常生活の基礎にあるものはこの連帯性である。全ての生活の底にはこの連帯性が横たわつてゐる。

この意味で、日常生活に於ける我々の行爲を決定するものは連帯性であると云える。

特にモラルに対する態度を決定する際にはどうである。我々がモラルに対する態度の決定を迫られた時、その態度の決定を迫まるものが何であつても、又無意識的に自分の態度を決定する際であれ、意識して決定する際であれ、自分の存在を考慮すると云える。勿論自分の存在を考慮するとは云つても、決して判つさり自分の存在を意識して考慮すると云うことではない。それはつまり我々の行爲へない意味での生活へは、我々の存在の確認だと思ふ点からである。我々の行爲は、我々の自分の存在へ無意識的に意識することであると思ふ。行爲の目的を持つと云うこと、その目的を達成する爲にいろいろ努力し、行爲すること、無意識に、習慣的に行爲すると云うこと、これらは全て広い意味での自分の存在を認めること、自分の存在を認めること、現に行爲しつつ、確認してゐることである。逆な云い方をすれば、私が今用いてゐる存在を確認すると云うことは、以上のような意味を持つのだと云うことである。要するに我々がモラルに対する態度を決定する際には、すぐその裏で常に自分の存在を認めてゐると云える。意識するとしなむに關わらず、我々がモラルに対する態度を決定すると云うことは、そう云うことだと云うことである。我々が我々自身の態度、行爲、生活を決定すると云うことは、連帯性の中で自分自身の存在を確認すると云うことである。我々が自分の存在を確認すると云うことは社会生活を営む我々の行爲、生活の底には常に連帯性を持つてゐる、そう云う我々としてはその連帯性の中で自分の存在を確認すると云うことでしかありえない。自分のまわりの人々との間にはめづらされてゐる連帯性の糸をはきり知ると云うことである、自分が動くことと云うことは、そのまわりにはりめぐらされた糸を動かすと云うこととあり、それは取りも道さずその糸の向こう端にある他人を動かすと云

うことである。社会生活を営んでいる我々は、我々個人だけの生活と云うものはあり得ないのであり、つねに自分の生活は何らかの形で他人の生活に影響を与えるものである。そうした連帯性の中での自分をばつきり知ることである。そして、つまり連帯性の中での自分をばつきり知ることには、その連帯性をばつきり知ることである。

人々にモラルに対するポーズをとらせるもの、そのポーズを決定するもの、それは以のような意味での連帯性であり、その連帯性以外の何ものでもない。(この意味で、我々の生活と政治とはじかに連がるものであり、政治とは離れた、政治とは無関係な生活などありえないと云えよう。) (私は鶴見俊輔等の考えの土台になっている「政治と生活とは無関係」という思想をもっとよく考えなければならぬと思う。)

日常生活に於て、意識的にも無意識的にも人々のモラルに対する態度を決定づける連帯性とは、それではどんなものであるか。それは実際的な日常生活の上で人々の態度に影響を与えるものであるから、決して観念的な抽象的なあいまいなものではない。従つてたゞ単に、連帯性とは同じ社会の中で人々が互に眼には見えぬが非常に緊密な系によつて結ばれていると云うことと答えるだけでは十分ではない。このような一般的な単純な、一律なものではない。それは勿論、その連帯性の本来的な形に於てとか、又原則的な形に於ては一つのすつきりした姿として表わすことが出来るであらう。が実際にはそうしたすつきりした姿では現われることは出来ないであらう。少なくとも現実的な日常生活に於て人々の広い意味での生活態度を決定するようない現実的な場合には異つた姿をとるものと考えられる。この場合には、各人／＼の生活や態度が異なるように、その各人／＼に於ては連帯性は異つているのであらう。同じ一つの事象に対して反応を示すとしても、人々は何らかの点では皆各々異つている。全く同じ反応、態度、生活を示すものはないと云える。と云うことは、それらの人々の態度生活を決定づける連帯性と云うものがその各人に於て異つているからだとと思われる。と云うよりも、人々は各人連帯性を異つて考えていると云つた方がいいであらう。又人々各人の連帯性は異つていると云つたほうがいいであらう。人々が各々連帯性を異つて考えていると云うことは、簡単に云えば「社会と云うものを、又そこに於ける人間の生活と云うものを、ひいては社会生活、人間生活の理想象と云うものを各々自分だけのものを持つていると云うことである。自分だけのものを何か社会生活に於ても持つてゐるわけである。人々に於ては、観念的な連帯性と云うものや、それの普遍性、又正しさなど考慮にはない。その前に自分の生活の重大さがある。従つて現実的な一般の人々(民衆)が連帯性をどのように考えているか、社

会的存在としての自分の存在、生活をどのように考えているかと云えば、決してそこには理論的な、観念的な「道徳観」など生れはしない、生きる為の「ずるさ」があるばかりである、どのようにすれば幸福な生活を導くことが出来るかと云うおだやかな「ずるさ」があるばかりである。

社会的な實際生活の中に人々の理想的な道徳性など求めることは無駄なことである。時間的、空間的不変性など備えた理想的な「道徳」などどこにも見当らない。

人々のモラルに対する態度を決定するところの連帯性としての自分の存在の確認は、民衆の生きる為の智慧ではない。生活に対する方便ではない。社会生活に対する個人生活の、全に対する個の方便ではない。現実生活の中で人々の生活態度、モラルに対する態度を考へるとき、その人々のモラルを受け入れる唯一の条件は自分の生活の保証である。モラルは人々の現実生活に於ては、自分の生活の保証の印である。従つてそのモラルがモラルとして社会に通用することの出来るのは、その社会に於ける人々の生活をモラルが保証することの出来る間だけである。

当為としてモラルが人々に働きかけるべきの形は、モラルから人々へと云う一つの天印で考へられる。モラルは人々へ働きかけ、規制し、積極的に影響を与えるのであるが、人々はモラルから働きかけられ、規制され、影響される。その両者の関係は一見積極的な態度と消極的な受動に思われる。しかし、実際にモラルが人々へ働きかける場合、モラルが保証として、人々の眼前に突き出すものが社会に生活するものとしての連帯性と、その中に於ける人々の存在である限り、人々はモラルに対しては又強い力を有しているのである。人々が何か全く共通するものをもつて結ばれる際にその力は表面に現われて来る。つまり人々の連帯性が、単なる生活の為の智慧にとどまらず、それ以上のものになつた際に人々のモラルに対する位置は、受動的なものから能動的なものへと移ることが出来る。連帯性の中で自分の存在を確認すると云うことが、単なる連帯性の中での生活の智慧の獲得以上のものになること、それは云つてみれば自分の存在の確認を通して、人間の存在の確認をなすことであり、誰れでもない人間と云うものの本質を確認することであらう。そしてそれは取りも直さず、モラルから「モラル」へ、モラルに対する人間の態度から、あるべきものとしての「モラル」に対する人間の態度へと進むことであらう。しかし、その間の移行は決して容易ではない。恐らく完全に為されることは不可能なことである。むしろ、そうした移行をする前で、むつと／＼考へなければならぬことが多くある。少なくとも方法として、生活者には生活者自身の思想の表現方法がある。それは、それの毎日をどう生きていくかと云うこと。L